

不信仰に陥った者たちへの励ましとしての聖餐  
——ウェスレーの宣教のわざとしての聖餐を基盤にして——

坂本 誠

ウェスレーはその生涯をかけて聖餐を大切にしてきた。16歳になる以前には聖餐に与っていた。日記、日誌を読むと、当時の英国教会が年に4回から6回しか聖餐をしていなかったのに対して、後期になると3、4日に1度の割合で聖餐に与った。ウェスレーの聖餐は、最初は小規模の聖餐であったが1765年以降、メソジスト運動が広がるにつれて、聖餐受領者の数は増大していく。日誌を見ると、初期にはソサエティのメンバーを英国教会に出席させ、聖餐を受領するように促し、後期には、聖餐式に多くの時間を割き信仰者の霊性に配慮した。聖餐は本人のみならず、メソジスト全体にとっても内面的な力となっていたのではないだろうか。

1791年にロンドンのシティーロードチャペルで亡くなるまで、彼は馬に乗り、多くの地域を歩き、その距離三十万キロ、説教回数は四万回という精力的な生涯を送る。身長は158センチだったと言われている彼が、これ程精力的に旅行をできたというのも、彼の福音宣教の情熱によるところが多いが、それだけでなく聖餐という場で信仰を確認していたからではないか。特に、ウェスレーは自己の信仰理解に戸惑いを覚えつつも、聖餐を用いて自分の信仰をみつめ、神に悔い改めて立ち返り、自分の信仰を確認しつつ天国を目指したのではないだろうか。

## I ウェスレーの聖礼典理解

ウェスレーが聖餐をどのようにみていたかをみていく前に、ウェスレーが聖礼典をいかに理解してきたのかを見ていきたい。彼は聖礼典を以下のように語る。

キリストによって定められた聖礼典は、単なるキリスト者信仰のバッジや証憑ではない。それは恵みのしるし、すなわち神の我々に対する好意のしるし（外的なしるし）であり、それによって神は目に見えない形で我々の内側に働きかけ（内的な恵み）、信仰を起こすばかりか、それを強め、確かなものとする。福音の時代に我々の主によって定められた聖礼典は二つあり、それは洗礼と聖餐である<sup>1</sup>。

聖礼典は「内的な恵みの外的なしるし」であり、可視的な「しるし」と不可視的・霊的な「実質」の部分から成り立っている。ウェスレーの場合、形式的に聖餐や洗礼を受けるだけでは不十分なのである。実質的な部分である神の恵みの受領が聖餐においては問われている。

## II ウェスレーの生涯と聖餐

ウェスレーが、いかに聖餐を不信仰に陥った者たちの励ましと考えるようになったのか。それは、ウェスレーの生涯、特に初期から中期のウェスレーの歩みが重要となる。

ウェスレーはアメリカに行く途中の船の中で嵐に出会い、死を恐れる。彼が船底に降りてみると、モラヴィア派の人々が熱心に賛美をし、祈禱をしていた。ウェスレーが死ぬのは怖くないのかと聞くと、彼らは神に対する絶対的確信があるから怖くないと答えた。その結果、モラヴィア派の人々との接触が始まる。帰国後、外的には様々な慈善活動を行い、キリスト者として歩んできたが、絶えず心の中では揺れ動き、罪から全く救われたという確信が持てず、自分はどう説教をやめるべきであろうかと、モラヴィア派のペーター・ペーラーに質問する。ペーラーは、信仰を説教し続けることを助言し、ウェス

<sup>1</sup> The Works of John Wesley (Bicentennial Edition), Abingdon Press, 1990, (以下 BE Works と示す) BE Works 5 p.188 参照。Sermon #15, 'Means of Grace', II-1, 1746.

レーを励ます。そしてモラヴィア派の影響を受けて、アルダスゲート街でのモラヴィア派の集会に出席し、1738年5月24日、第2の回心を体験する。

しかし、それですべてが解決したのではなかった。確かに1738年5月24日は、ウェスレーの生涯の中で一つの転機であったことは事実である。1738年10月30日の兄弟サムエルに宛てた手紙の中でウェスレーは以下のように語る。

キリスト者ということとで私が意味していたのは、キリストを信じる者は、罪がもはや支配していない者でした。そして、この言葉の本来の意味で、私は5月24日の心が不思議と熱くなる経験まではキリスト者でなかったのです。というのも私は罪と闘い続けたのですが、罪が私を支配していたのです。しかし、この日を境に罪は支配しなくなりました。それはキリストの自由な恵みによるのです。<sup>2</sup>

1738年5月24日はウェスレーにとっては重要な転機であったことは事実であった。しかし、それですべて解決したわけではなかった。ウェスレーの中には回心後も闘いがあったのである。その様子をウェスレー自身は1738年11月に以下のように語っている。

あなたは、現在、罪からの自由を味わっておられるでしょう。しかし、それは罪が一時的に停止しているに過ぎないのです。決して罪からの解放ではないのです。あなたには平安がありますが、それは真実の平安ではないのです。もし死が近づくならば、恐れが戻ってくるのです。<sup>3</sup>

それでは、そのような自分を克服できない状態はどこから来るのか。ウェスレーは、以下のように自分を回想する。

私は現在キリスト者ではないのです。・・・キリスト者というのは、キリストの霊の実を持っている者です。・・・それは、愛、平安、喜びなのです。

しかし、これらのものを私は持っていない。私は神のどのような愛ももっていない

<sup>2</sup> BE Works 25 p.575, Letter to Samuel Wesley, 1739.10.30.

<sup>3</sup> BE Works 19 p.22, 1738.11.23. この言葉は友人チャールズ・デラモッテがウェスレーの状態を語ったもの。

ないのです。父も子も愛していないのです。私は別の問いによって答えます。「あなたが私を愛しているといかにして知ることができますか。いかにしてあなたが熱い、かたいいかを知ることができるのでしょうか。」<sup>4</sup>

ここからでる結論についてウェスレーは、

ここから私は以下のことを結論します。……私は自分のすべての持ち物を負しい者を食べさせるために与えたのですが、私はキリスト者ではないのです。私は困難に耐え、すべての事柄において自己否定をなし、十字架をとりあげたのですが、私はキリスト者ではありません。私のわざには何の意味もありません、受難も何の意味もありません。20年以上も恵みの手段を常に使用してきたのですが、私はキリスト者ではないのです。他のすべての信仰は持っていますが、心を清めてくれるあの信仰は持っていないのです。誠に誠にあなたに告げます。私は再び生まれなければならぬのです。私やあなたが生まれ変わらないう限り、神の国を見ることはできません。<sup>5</sup>

ウェスレーは、自分の中には聖霊の実である愛、平安、喜びがないことに気づいたのである。罪を克服できずに、確信を持たない、信仰が奮闘し動く自分自身を発見するのである。

### III 決定的な事件

ウェスレーは、回心後、ドイツ国内を訪問し、モラヴィア派から小グループによる牧会の素情らしさを学ぶ。それは1938年6月から9月にかけて行われた。そしてついにその事件が起こる。ウェスレーは、1938年7月4日マイエボルンでモラヴィア派より聖餐に与ることを拒否されたのである。同行の友人インガムには許されたが、ウェスレーには許されなかった。岩本氏はこの事を以下のように語る。

<sup>4</sup> BE Works 19 pp.29-30, 1739.1.4

<sup>5</sup> Ibid, pp.30-31.

ジョンはモラヴィア教会から「疑いを抱いているため平安がなく、休みなく揺れ動いている信仰者であって聖餐を受ける資格がないもの (homo perturbatus)」として聖餐を拒否されたのである。もともと、聖餐を軽視し、無視するような人物であったならば、それは取るに足らない出来事であつたらう。しかし、生涯にわたって彼ほど聖餐を重視し尊重した人物も少なかった。その彼が、礼拝において聖餐を拒否されたのであるから、彼にとつては一大事であつたと思われる。……聖卓に進み出る相手を「疑いによって揺れ動く信仰者」と断じて、主の晩餐への出席を拒否するキリスト教とは一対何なのか？ 弱い信仰者に対してこそ、主の晩餐への招きと慰めはあるべきではないか。恵みの手段は、このような状況の者に導かれるべきではないのか。ここで一切の基準とされた「信仰の確信の有無とは何か」ということであつた。<sup>6</sup>

それは、結論からいえば、モラヴィア教会との信仰理解の相違であつた。相違点は大きく分けて二つあつた。第1は信仰の度合いの存在を信じるウェスレーとそれを認めないモラヴィアの相違。第2はあらゆる恵みの手段を利用すべきだと主張するウェスレーと、キリストのみが恵みの手段であると考え、一切の他の恵みの手段を否定するモラヴィア派の相違であつた。それはウェスレーのかかわっていたロンドンのフェッターレーンソサエティで既に起こっていたことであつた。

1738年9月ドイツから帰国して、わたしはキリストの血潮を信じることによる偉大な救いをのべつたえた。同時にそれは、神のすべての戒めを守り、機会あるごとに、すべての人々に善を施しながら待ち望むべき救いでもある。ところが翌39年9月ごろ、わたしは兄弟の不在中に、第一点、「疑いや恐れを少しでも持つ者、清い心を持たない者は、義とされる信仰を持ってない者たち」と断じる者、第二点、「恵みの手段を否定しないと真の信仰を持つものではない」と、信仰の静止主義に陥る教えを主張する人々が私たちの群 (フェッターレーンソサエティ) の中に大きな混乱を呼

<sup>6</sup> 岩本助成「オールダースゲイト再考」ウェスレー・メソジスト研究5、ウェスレー・メソジスト学会、教文館、22頁。

った者たちにも、ある程度の信仰は残っており、罪に翻弄されるなかで聖餐を受けることによってもう一度初めの愛に戻ることができるという意義であった。救いの全き確信を持つまでは、誰も主の晩餐を受けるべきでないというモラヴィア派の主張に対して、ウェスレーは

恵みから墮落した場合に、多くの者が、サタンの策略に陥っていると嘆き、その墮落から逃れられないと思うってしまう。その結果、彼らは神の賜物を否定するように説得され、救いの信仰は一度も持たなかったかのように確信してしまう。彼らは恵みの手段を使用しなくなり、キリストのみを信頼すべきだと考え、あわれな罪人であり続ける。<sup>9</sup>

その結果、彼らは神の賜物を否定するように説得され、救いの信仰は一度も持たなかったかのように確信してしまう。結局、彼らは恵みの手段を使用しなくなり、キリストのみを信頼すべきだと考え、あわれな罪人であり続ける。<sup>10</sup>

このように、キリストのみを恵みの手段としてしまう立場に対して、ウェスレーは以下のように語る。

しかし、ついに一人の女性を発見した。多くの者は（彼らの習慣に従って）彼女には信仰がないことを説得しようとしたが、彼女は彼らが抵抗できない霊によって以下のように答えた。「私が今生きている生は、私を愛し、私にご自身を与えられた神の子における信仰によって生きている。主はパンをさくことにおいて私にあらわれたその瞬間から一度も私を離れなかった。」<sup>11</sup>

さらにウェスレーはその事において以下のことを発見したと語る。

<sup>9</sup> BE Works 19 p.120, Journal 1739.11.7.

<sup>10</sup> Ibid.

<sup>11</sup> Ibid.

び込んだ。モラヴィア派の人々は、人は疑いや恐れからまったく解放されなければ、また厳密な意味で新しい清い心を持たなければ、義とされる信仰に達することは出来ない」と主張した。疑いや恐れを排除する前には、恵みの手段を守らなくてもよいと主張したのである。

しかし、わたしは彼らに答えたい。あらゆる恐れ、疑いの解決の前にも「ある程度の信仰」を得ることが出来る。新しい清い心を得る前にも、神の戒め、特に聖餐を守るべきである、と。実は、この真理を、わたしは、イングランド教会からだけでなく、モラヴィア派からも学んだのである。<sup>7</sup>

ウェスレーは信仰を段階的にとらえる。ここからうまれた結論は以下の通りである。

(1) 聖書からみても、教会の伝統から見ても、群の人々の経験からみても、信仰の度合いは (degree, 程度、力量) というものは存在する。(2) また確証 (確信) の度合いも存在する。(3) 「恵みの手段」は、確信に先立って奨励されるべきもの。(4) 義認は必然的に確信を生むものとは言えない。(5) 義認の確証は、必然的に疑いや恐れからの完全な自由をもたらすものではない。(6) 義認の確証は、必然的に全き愛、平和、喜びをもたらすものではない。(7) 信仰の確信は、十全な救いそのものではない。<sup>8</sup>

以上、ウェスレーが経験してきた出来事を述べてきた。ウェスレーは恵みの手段である聖餐をどのような意味で用いようとしたのか。

#### IV 不信仰に陥った者たちへの励ましとしての聖餐

ウェスレーは、聖餐に与えることに明確な意義を持たせた。それは不信仰に陥

<sup>7</sup> 同論文、23 頁。

<sup>8</sup> 同論文

この否定できない事実から推量できるのは、信仰を持たない者も主の晩餐において信仰を受け取れるということである。何故か。(1) 恵みの手段、外的な儀式が存在する。そこにおいて神の内的な恵みが人に伝えられ、救いをもたらす信仰が、それ以前は持っていないくても与えられる。(2) この手段の1つは主の晩餐である。(3) この信仰を持たない者は、神が制定された主の晩餐または別の恵みの手段を使用しながら待つべきである。<sup>12</sup> (筆者傍線)

以上のように、ウェスレーは、主の晩餐を受けることにおいて、一度信仰の確信がなくなつた者が再び救いの恵みに立ち返ることができるとを発見したのである<sup>13</sup>。問題となるのは「信仰を持たない者」がどのような人を指すかという点である。それは、これまで保持していた救いの確信という意味なのか。それとも全くキリスト教の福音を知らない人々のことを指しているのだろうか。救いを獲得することについてウェスレーは以下のように語る。

私は以下のように信じる。それを獲得する方法はキリストを待ち、静まることである。つまりすべての恵みの手段を使用することにおいて。それ故に、私は自分に信仰(克服していく信仰 conquering faith)がないことを知っている人が教会に行くこと、聖餐を受ける権利があると信じる。<sup>14</sup>

ではこの克服していく信仰とは何か。この為には、ウェスレーの言う不信仰の内容を考えなければならぬ。

### 1. 不信仰とは何か

ウェスレー研究者、オレ・ボーゲン(Ole Borgen)はウェスレーの語る「不信仰」(unbelief)を定義した。ボーゲンは、「不信仰」(Un-belief)は「信仰がない」(Non-belief)こととは異なるとする。ウェスレーが意味していた「不信仰」は、未だ「征服

<sup>12</sup> Ibid., p.121.

<sup>13</sup> 同様な例が存在する。Journal 1739.9.20.

<sup>14</sup> Journal 1739.12.31.

していく信仰」(Conquering faith)を持っていない人であり、神の恵みが必要であることを知っており、キリストが罪深い、助けようのない人の為に死んで下さったことを知っている人のことを言う<sup>15</sup>。この信仰は、「勝利を得る信仰」とも訳せる。克服していく信仰の原文には脚注があり、それは1738年5月19日の日誌を指している。ウェスレーはそこにおいて、キリスト教の適切な信仰を既に得たと思つてはならない。自分は最初、「一般的な従順、神の戒めを守る」ことにおいて救われたと信じていた。しかし、「内的な従順、ホーリネス」という概念はなかったとしている<sup>16</sup>。「克服していく信仰」は外的な儀式を守ることに伴うキリスト教の確信ではなく、内的に救いの確信に生きること、勝利を得る信仰であり、ウェスレー自身の言葉に換言すれば、「僕の信仰」ではなく「神の子の信仰」であった。

これに関しては、ウェスレーが目指していた真実のキリスト者(A Real Christian)との関係が重要である。ウェスレーは以下のように語る。

私達は自分自身を特定のセクトや党の創設者、首謀者として、立てているのではない。それは我々の考えから全く離れているものである。しかし、名ばかりのクリスチャンであるが、心と生活においては異端である人々を、真のキリスト者、純粋なキリスト教に呼び戻す為の使者であると信じている。<sup>17</sup>

ここにはウェスレーの使命が見事に描かれている。さらに1784年にされたウェスレーの「なぜ世からさらなければならないか」という説教の中でも「22歳の時に名ばかりのクリスチャンではなく、真実のキリスト者になるという確かな解決が私に与えられ」と語っている<sup>18</sup>。晩年になつても、ウェスレーは、真

<sup>15</sup> Ole E Borgen, *John Wesley on the Sacraments—A Definitive Study of John Wesley's Theology of Worship*, (Francis Asbury Press, 1972), pp.199—200.

<sup>16</sup> Journal 1738.5.19. ウェスレーは父にさらに光を願うなら、主は更に光を与えられようとしている。

<sup>17</sup> Works III, 240—46, A Preservative against Unsettled Notions in Religion, (1758). Albert Outler, *John Wesley*, Oxford University Press, 1964, p.20.

<sup>18</sup> 説教 81・二三, In What Sense we are to Leave the World ここにある22歳の時は

実のキリスト者になることを願っていた<sup>19</sup>。ウェスレーには九分九厘のキリスト者と全きキリスト者の区別も存在するが、聖餐を通して、真実のキリスト者、全きキリスト者になることをウェスレーは願っていたのである。その為には、自分が九分九厘のキリスト者であることを確認すると共に、これまでのキリスト者としての歩みを悔い改め、恵みを受け取り直し、回心して社会に遣わされていくという役割を聖餐に持たせたのである。

当時ウェスレーの周りには幼児洗礼を受けて安心しきってしまい、名目上のキリスト者が多かった。さらにクリスチャンになりながらも、信仰が長続きせず教会から離れている人がいた<sup>20</sup>。ウェスレーの聖餐にはこれらの人々が視野に含まれていたのである。それ故に聖餐を回心を与える儀式として定義することは必要であった。ウェスレーの手紙や著作集には、人々が聖餐を受けて、祝福された例が存在し、積極的な聖餐理解が見られる<sup>21</sup>。

## 2. 先行する恵みとの関係

このことに関しては先行する恵みとの関係においても重要になってくる。ウ

<sup>19</sup> 1725年のことを指す。通常第1回目の回心と言われる年代である。

<sup>20</sup> さらに1773年6月8日にミス・カミンスに宛てた手紙の中で、「真実の聖書のキリスト者になる」という表現が存在する。手紙 Letter to Miss Cummins, 1773.6.8. 18世紀初めにはおよそ17万9千人の長老派教会員、5万9千人の独立教会派(組合教会派)、5万8千人の洗礼派教会員、そして3万8千人のクエーカー教徒がいた。その多くが関心をなくしていた。ロイ・ポーター『イングラランド18世紀の社会 叢書・ユニベルシタス(529)』目録公和、法政大学出版協会、1996年、260頁。その他、正規に国教会に登録されていない人、キリストを体験していない人がいたとすれば幼児洗礼を受けていない人も多く存在していたのではないだろうか。

<sup>21</sup> 日誌 1739.9.20, 日誌 1766.4.4. その他の例としては、ある女性が8年間病であり弱っていたが、重荷をおった罪人が聖餐を受けたいと望み、彼女の魂に休息を感じた。その瞬間から知識と神の愛が増した。日誌 1766.4.4. 更に1763年の終わりにおこったエリザベス・タックの例があげられる。彼女も死の淵にあったが、説教者と会話し、健康が戻った。そしてイースターの日に聖餐を受け、「義としたのは神である。誰が責めるだろうか」という声を聞いた。彼女は家に帰り、夫に「今や私の罪が赦された。主が私を愛し、私も主を愛しているので死ぬのは怖くない」と説いたとしている。Works XIV p.263 参照。

ェスレーは聖餐を「先行し、義とし、聖化する恵みを伝える手段」として見ていた<sup>22</sup>。ウェスレーはどのような意味で聖餐を先行する恵みと結びつけたのであろうか。ウェスレーによれば先行する恵みはすべての人に無条件に与えられている恵みであった。もしそうであるならば、先行する恵みを聖餐時に受けるという意味は何なのか。

この点に関して重要な神学者がロブ・ステープルスである<sup>23</sup>。ステープルスはこの点において2つの疑問が生じると語る。まず第1は、先行する恵みは義認の前に存在する恵みであるので、未信者もそれを受け取るように招かれていることを意味していたのではないかという問いである<sup>24</sup>。第2の問いは、「もし先行する恵みが与えられるなら、そのような人は受けた時点では先行する恵みを持っていないことを意味しているのか」という問いである<sup>25</sup>。ステープルスは、この点において重要なのはウェスレーの言う信仰の程度 (degrees of faith) であると言う。ウェスレーは信仰を段階的に捉える。

ウェスレーには有名な九分九厘のキリスト者と全きキリスト者の区別が存在する。さらに、ウェスレーはクリスチャンであっても、先行する恵みが取り去られることがあると考えていた。そのような状態は、具体的には霊的な事柄への飢え渇きがないことを指す<sup>26</sup>。しかし、先行する恵みを失った人は、聖餐を通してもう一度先行する恵みを受け取ることができる。その手段が聖餐であった。ステープルスによれば、ウェスレーは(1)人はいかなる信仰なくとも聖餐に来ることができ、(2)聖餐を効果あるものにするために人は信仰を持たなければならないという両面を説いた。この両者は矛盾するように思うかもしれないが、人は、救いの信仰がなく、外見がどのようなものであれ、ある程度の信仰を保持しているのであり、そのような信仰は「からし種の信仰」として

<sup>22</sup> 説教 16 「恵みの手段」二・三。

<sup>23</sup> Rob L. Staples, *Outward Sign and Inward Grace—The Place of Sacraments in Wesleyan Spirituality*, (Beacon Hill Press of Kansas City, 1991). ステープルスはこの点に関して1章を割いている。

<sup>24</sup> *Ibid.*, p.255.

<sup>25</sup> *Ibid.*

<sup>26</sup> 説教 85 「自分の救いの達成に努める」三・4

主のテーブルに人をつかせるとしている<sup>27</sup>。

もう一人の重要な神学者はオレ・ボーゲンである<sup>28</sup>。ウェスレーが聖餐を回心の恵みと見ていることを認める時に問題になるのはウェスレーの強調した先行する恵みとの関係である<sup>29</sup>。ウェスレーは聖餐において先行する恵み、「救いの最初の実」が伝えられるとした。しかし、このことは先行する恵みをすべての人が持っているという考えと矛盾するのではないか。ウェスレーはこのことにおいてどのような人を対象にしていたのか。3つの可能性がある。第1は、先行する恵みが消えて救いの信仰がある程度なくなっている人。第2はウェスレー自身の言葉によれば、「霊的な感覚が覚まされておらず、霊的な善や悪が認められない」人。第3は、主が与えるものは何でも受け取る用意があり、我々が罪深く、助けようのない状態であるという認識を持っている人である<sup>30</sup>。確かにウェスレーにとって主の晩餐は罪を抑制したり、罪が赦されたり、神の像において魂を新しくしたいと望む人にとって重要な恵みの手段である。同時にウェスレーは聖餐を回心の恵みとするが、ここにおいて、ウェスレーは新しい領域に踏み出すとし、ウェスレーの回心の恵みとしての聖餐を強調している<sup>31</sup>。ウェスレーの根拠はどこにあったのだろうか。

ボーゲンはウェスレーの根拠を3つに分けて考える。第1の根拠は、神は自由にその恵みを、様々な恵みの手段を用いて伝えること。第2に主の晩餐は罪に陥った人に対して罪の取り消しを与える。一度信仰を持っていた人に赦しととりなしが与えられるとしたら、より劣った程度の信仰を持った人にも同じことが起こる。第3にウェスレーは経験によって主の晩餐のテーブルで義とされたことを知っていたとする<sup>32</sup>。

マルコ9章14-29節には不信仰に陥った父親の神に従いたいという望みが書かれてあ

<sup>27</sup> Ibid., pp.258-259. ステープルスは3つの恵みを以下のように定義する。

先行する恵み：罪を抑制する。義とする恵み：罪が赦されていることを示す。聖化する恵み：魂を神の像において刷新する。

<sup>28</sup> Ole E Borgen, *John Wesley on the Sacrament*, (Abingdon Press 1992).

<sup>29</sup> Ibid., p.184

<sup>30</sup> Ibid., p.195.

<sup>31</sup> Ibid., p.197.

<sup>32</sup> Ibid., pp.197-198.

る。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」「信じます」と「信仰のないわたし」という表現は矛盾しているが、からし種の信仰はまた取り去られておらず残っているのではないだろうか？ 信仰者は霊的な事柄への飢え乾きがなくなることが事実上ある。しかし、聖餐を通してそのような人も、もう一度先行する恵みを受け取ることが出来る。人が救いの確信を失うことがあったとしても、人はある程度の信仰を保持しているので、「からし種の信仰」において人はテーブルにつくことが出来るのである。

ここにおいてもステープルス同様、信仰の程度への言及、実際に回心者が与えられたという事実が根拠になっている。ウェスレーは聖餐の機能を再定義し、救いの順序において継続的な恵みをもたすものとして捉え、神の恵みは実際に与えられることを強調した。以上のようにウェスレーは神に対して罪を犯した人に赦しと生きる為の新しい力を与えた。またその赦しは求めている罪人に対しても与えられるとしたとする<sup>33</sup>。ウェスレーが聖餐に回心の機能を与え、初めの愛に戻ることを強調したことには、当時の名目的クリスチャンに対して初めの愛に戻るというウェスレーのメッセージだったのではないだろうか。ウェスレーにはエビクレシス（聖霊降臨）の祈りが存在し、神秘的な仕方では真臨在が起こる。神と人との交流をもたす聖餐がメソジストの聖餐であったのである。

永遠なる御霊よ、来たり給え、救い主のすべての死による功績、すべての彼の受難をもたらし給え。キリストの死の真実の記録者として、今や生きた信仰が付与される。彼の偉大な救いをあらわし給え。我々の心に福音を宣べ伝え給え。キリストの死の目撃者よ、来たり給え、神の記憶をもたらす者よ、キリストを各自と我にもたすことにより汝の力を感じさせ給え<sup>34</sup>。

一般に先行する恵みは人を義とする恵みに先んじる神の恵みを意味する。先

<sup>33</sup> Ibid., p.199.

<sup>34</sup> *The Eucharistic Hymn*, No.16.これはローマのクレメントのリタージュよりとられたもの。Geoffrey Wainwright, *Doxology - The Praise of God in Worship, Doctrine, and Life*, Oxford University Press, 1980 参照。

行する恵みは人を救いにもたらず為に備えさせ、導く恵みである。そして先行する恵みは普遍的に与えられている神からの恵みでもある。ウェスレーの視野にはすべての人が入っていたとしても過言ではないのでないだろうか。聖霊は何をもたらずのか。聖霊はキリストの受難の功績を信仰者に伝えるだけでなく、偉大な救いを啓示する。その為に聖霊降臨を祈るのである。

以上、様々な角度からウェスレーの回心の業としての聖餐を考察してきた。ウェスレーの願いは、人々が救いの信仰を獲得し、聖餐に与りながら、天国への道を真のキリスト者として歩むことであった。当時の人々にとって聖餐は再びキリスト者の道へと戻る場であると同時に、先行する恵みを受け取り直し、義とする恵みにおいて確信を得る手段であったのである。ウェスレーの立場はアルメニアンとしての立場でもあり、信仰者は責任を持って信仰を維持するために恵みの手段を使用しなければならないものであった。恵みから墮ちることがあっても、聖餐は先行する恵みを与える手段であるから、それを受け取り、初めの愛に戻り、信仰生活を歩み続ける。その意味でウェスレーは聖餐を「永続的な信仰義認の場」(常に罪人として主の御前に逐り、主の赦しと愛を受ける場)として見ていたのではないだろうか。ウェスレーにとって聖餐にあずかることは、自分をキリストの前に差し出し、罪人としての自分を見つめ、神の赦しと愛の中に自分を浸すというキリスト者の内的いのちの源泉であったのである。

### どうして回心の恵みとしての聖餐なのか？ 結語にかえて

ウェスレーは聖餐を名ばかりのキリスト者が真実のキリスト者になる為の回心を与える儀式としてみた。この意味において聖餐に宣教的な性質を持たせていた。ウェスレーにとって聖餐は先行する恵みを見出せなくなった者や罪が赦されたという確信を失った者が、聖餐を受けることにより回心を与えられ、信仰復活の手がかりを掴める場であった。これはウェスレーがソサエティにおいて、様々な教派の人々に聖餐の場を開放したことも関連する。

現在、聖餐式の式文の中の「ふさわしくないまままで」を差別的であるとして削除するという例も聴くが、ウェスレーの答えは以下のようなものである。「不信仰に陥り、ふさわしくないと感じていても、からし種の信仰さえあれば、聖餐を受けることができる。

ふさわしくなくいままでも、いやふくさわしくなくでも『からし種の信仰』さえあれば、聖餐を受けて、回心し、確信をあたえられようではないか」と呼びかけるのではないだろうか。

マクグラスは来日公演で以下のように語っている。

キリスト者は、救いが実現するのは、われわれが神と和解するときだけでなく、またわれわれが「他者とともに生きることを学ぶ」ときだけでなく、われわれが他者に向かって開き、われわれが神に抱かれてきたのと同じ抱擁において他者を抱くという、危険なそして高価な一歩を踏み出す時に実現する<sup>35</sup>。

キリスト者が神の神の愛を思い起こし宣べ伝える中心的方法への一つへとわれわれの目を向けさせるのが聖餐式、ここに神の款待 (hospitality) を見出す<sup>36</sup>。

こんな罪深い私が聖餐に与れるのか。パンはぶどう酒は罪人のためにこそ有効である。これがウェスレーのメッセージではないだろうか。私たちは、聖餐を神の恵みへの神の款待として今後も行っていくのではないか。

(日本ナザレン神学校校長、日本ナザレン教団・小岩キリスト教会牧師)

<sup>35</sup> アリスター・E・マクグラス、『聖餐 その歴史と実践』、キリスト新聞社、2010年、9頁。

<sup>36</sup> 同書14頁。